

「鉛筆と消しゴムの漫才がしたいな」

演者

金 金子（小学4年生）

中 中西（小学4年生）

金 「どうも～、金子でえす」

中 「中西でえ～す」

金 「ねえ、ねえ、あれよかったでしょう」

中 「急になんの話ですか」

金 「(うれしそうに) 12月のスカウト祭にやったやつですよ」

中 「餅つき？」

金 「(びっくりしたこえ) えーっ！

(まじめなこえで。右手の人差し指を左右に振りながら) そんなんしたかな。」

中 「(へいきなかおで) してへんかなあ。じゃあ～、手品？」

金 「(びっくりしたこえ) えーっ！

(まじめなこえで。右手の人差し指を左右に振りながら) そんなんしたかな。」

中 「(へいきなかおで) してへんかなあ。じゃあ～、凧揚げ(たこあげ)？」

金 「(びっくりしたこえ) えーっ！

(まじめなこえで。右手の人差し指を左右に振りながら) そんなんしたかな。」

中 「(へいきなかおで) してへんかな。じゃあ～、餅つき？」

金 「(びっくりしたこえ) えーっ！

(まじめなこえで。右手の人差し指を左右に振りながら) それ、さっきいうたよ～」

中 「(びっくりしたこえ) えーっ！

(まじめなこえで。右手の手をメガホンにして) そんなんいうたかな」

金 「(へいきなかおで) うん、いうたいうた」

中 「それでは、正解を発表したまえ」

金 「ぼくが、きみにきいているんやないか」

中 「スカウト祭のスタンプということはわかっているんだよ」

金 「なんや、わかっているやないか。えらい遠回りしたな」

中 「せっけんとタオルが話すやつやな」

金 「えーっ。そんなんあったかな」

中 「(へいきなかおで)

ううん、じつは、ボールペンとシャーペンが話すやつよ」

金 「もうちょっとやなあ」
中 「はよ、正解いうてみ」
金 「またかいな。きみにきいているんやろ」
中 「けしごむとえんぴつだということはわかっているねん」
金 「わかってるんやんか。それな、僕らもしたいな」
中 「やってみなさい」
金 「ちがうがな。きみと僕がやるねん」
中 「やってみたいけど、内容覚えていません」
金 「アドリブが大事やねん」
中 「そんなんいうてもなあ」
金 「気にせんでもできるよ。さあ、やるで」
中 「じゃあ。鉛筆と消しゴムの役をきめなあかんやろ」
金 「そんなん、どうでもええがな」
中 「あかんよ。イメージでけへん。僕、とにかく鉛筆やるわ」
金 「じゃあ、突っ込みいれるぞ」
中 「鉛筆を突っ込まれたら、痛いがな」
金 「その突っ込みでなくて。
ああ！ さきに突っ込まれてしもた。ぼく、とってもショック！」
中 「あんたは消しゴム。ショックは、消しゴムでけせばいいんや」
金 「また、やられた。ダブルショック！！
よし、頑張ろ。きみが鉛筆で、僕が消しゴムちゅうことで、二人が話をするんよ」
中 「鉛筆と消しゴムは話なんかせんやろ？」
金 「そこが面白いやんけ」
中 「じゃあ、消しゴムのどこに口がついてるの？」
金 「それはなあ。困ったがな。その質問？」
中 「ちゃんと答えてえな。まじめに考えたらいかん。漫才やからね。
さあ、答えてください。」
金 「わかった。鉛筆が消しゴムに口を書いたらいいんじゃない」
中 「おお、グッドアイデアですね。
じゃあ、聞くけど。いま鉛筆に口がついとらんけどなんでですか？」
金 「そんなんわからへんの〜。消しゴムが鉛筆の口を消したからやん」
中 「さえていますね。じゃあ、鉛筆の口は誰が書くねん。口がないから話でけへんよ」
金 「それはなあ。困ったがな。その質問？」
中 「ちゃんと答えてえな。まじめに考えたらいかん。漫才やからね。
さあ、答えてください。」
金 「またそれかいな。うう〜ん。そうや！鉛筆は12人兄弟なんよ」

中 「えらい子沢山やな」
金 「だって、鉛筆は、1 ダースごとに生まれてくる」
中 「さすが、なっとく。おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ」
金 「おいおい、1 2 回もなくんか」
中 「いま、鉛筆になりきっているんだから」
金 「生まれたときには、口ついていないんちがうか」
中 「かたいことは言わない。漫才ですよ。はい、小学2年生になりました」
金 「うわあ、成長が早いなあ」
中 「今は、みんな、カブスカウトに入っているよ」
金 「強烈（きょうれつ）！ 鉛筆兄弟だけで、2組できますね」
中 「おじさんもお婆さんも1 2人兄弟なんよ」
金 「おそるべき家族（かぞく）ですね」
中 「えへへ、いそこは、1 3 2人います」
金 「うっ、ひやあ、おじさんとお婆さんが1 1人にそれぞれ1 2人の子供で、1 3 2人
ですか」
中 「おとうさん、お正月にお年玉わたすのに銀行でお金を借りていますよ。多すぎます
よ」
金 「名前もおぼえられへん」
中 「名前は、番号ですましています」
金 「1 から1 2番ですか」
中 「はい。おとうさんが5番目に生まれて、お母さんが1 0番目に生まれた」
金 「きみは何番目に生まれたの」
中 「5番目」
金 「君の名前は、なんていうの」
中 「チチ5番とハハ1 0番の5番の子供」
金 「えらい味気（あじけ）のないな名前ですね。君の子供の名前はどうかの」
中 「チチ3番とハハ8番の9番の娘さんと結婚すると、1番目の子供は、
チチ5番とハハ1 0番の5番のチチとチチ3番とハハ8番の9番のハハの1番の子
供になります」
金 「うわあ、すごいなあ。もっぺん言うてみて」
中 「チチ3番とハハ8番の9番の娘さんと結婚すると、1番目の子供は、
チチ5番とハハ1 0番の5番のチチとチチ3番とハハ8番の9番のハハの1番の子
供になります」
金 「もう、おぼえられへん。あたまがおかしくなったわ」
中 「ところで、鉛筆の口はどうかくの」
金 「よくそれを思い出したね」

中 「はいはい、頭を切り替えてください。口はどう書きますか？」

金 「きっと、鉛筆兄弟は仲がいいから、お互いに口を書きあうんだろうね」

中 「そんなら、一度に1 2人分鉛筆けずるんか。ぜいたくやな」

金 「頭を削らんかったら、みんな同じに見える。見分けがつかへん」

中 「確かに、頭のかりかたが1 2とおり。
それで、消しゴムは、かわいそうだね」

金 「なんや、こんどは、そうくるか。で、どこがかわいそう？」

中 「だって、兄弟おらへん」

金 「べつに一人ぼっちでもかまへんで。かわいい消しゴムがきたら、ぼく使われへんよ
うになってしまうからね」

中 「そういえば、ずっと長生きしていますね。お年はいくつですか」

金 「そらあ、きみのおじいさんから知っているから、ずいぶん年がたったな」

中 「僕のおじいさん、どんな人だった？」

金 「達筆（たっぴつ）だったな。ぼくはずっと見ているだけだった。お手伝いせんでよ
かったものね」

中 「それで、長生きしてるわけですね」

金 「最近の鉛筆は、字がへたになったので、手足を使っていっぱい消さないといかん。
首も使うわで、ぼくの体は、すっかりずんどうスタイルになってしまった」

中 「これが、ほんとの消しゴムですね」

金 「ありがとうございました〜」